

宝物殿開館記念、二つの展示会―横尾忠則個展と總持寺秘宝展

鶴見大学仏教文化研究所客員研究員 尾崎 正善

はじめに

只今、ご紹介に預かりました尾崎正善です。今回のシンポジウムのタイトルは「曹洞宗の文化財」ですので、私の発表は、お配りの資料の「はじめに」にも書きましたように、今回の展示会に出品されました總持寺御開山瑩山禪師が定めた『瑩山清規』の資料紹介が、最初の課題でした。

しかし、実際にこの展示会を行う主体というべき總持寺の宝物殿、現在の宝蔵館「嫡々庵」は、先ほど伊藤所長からもありましたように、瑩山禪師の六百五十回大遠忌を記念して作られたのです。その時の展示会、さらにその後何回か秘宝展を行っておりますが、その初期の記録というのがあまり公にされておりません。

本山の宝物殿が、当時何を目指していたのかということを変更して考える意味で、本日は宝物殿の開館当初の動向を紹介させて頂きたいと思えます。(建立当初の「宝物殿」の呼称を使用致します)

一、横尾忠則個展

最初に、宝物殿の開館は、昭和五十一年（一九七六）一月です。落慶したのは、昭和四十九年（一九七四）九月

二十七日でした。この詳しい開館の日程及び当時の様子というものも、今回のシンポジウムのための調査の過程で、改めて知る事ができました。



写真1

その後の開館記念の展示会として、実は、二つの企画展が行われていたのです。それは、あまり知られていないところですが、「横尾忠則個展」と「總持寺秘宝展」というものです。

開館記念展の話をする前にお聞きしますが、總持寺の宝物殿に行かれたことがある方はいらつしやいますでしょうか。あの立派な建物の中で、開館記念として行われた最初の展示会が、横尾忠則氏の個展であったということは、私はびっくりしたのです。

最初にお示ししますのは、神奈川新聞掲載の横尾忠則個展の宣伝広告(写真1)です。年号が書いてありませんが、その前年ですので、昭和五十年十二月に掲載されたものです。主催が、「三進」という企画会社です。この会社に関しては、よく判らなかつたです。横尾忠則氏の関係、美術関係のイベントを企画する会社では無かつたかと思えます。それと、共催は大本山總持寺、神奈川新聞社、白字会となっております。

その次は、暮れも押し迫った十二月三十日に、神奈川新聞に掲載された記事です。これについては、資料の方に全文ではありませんが、活字化しております。

(資料一) 横尾忠則個展 展示会記事(神奈川新聞・昭和五十年十二月三十日)

「元旦から総持寺宝物殿で 闇と光の世界へ 横尾忠則 イメージ一新し個展」

元旦にオープンする横浜・鶴見の大本山總持寺宝物殿で、開館記念の「横尾忠則個展」が三進主催、神奈川新聞社などの後援によって一日から十五日まで開かれる。宝物の小仏像と横尾氏の作品を組み合わせて展示するユニークな形式で、このところ宗教色の濃い作品を描き続けている横尾氏にとっても初めての試み。

(中略)

「無神論者」だった横尾氏と宗教との出会いは五年前にさかのぼる。四十五年一月、交通事故にあい一年半の闘病生活。創作への「禁欲状態」の中で、自分自身への問いかけを通じて、「内なる世界」に目を開き、宗教的なものに関心を持ち始める。その結果、作風も大きく変容した。(中略)

個展には、これら四十六年以降の近作の中から、ポスター、版画百四十五点のほか、ほんの装丁、レコードのジャケット、雑誌のイラストなどの小型グラフィック多数も出品され、ポスター、版画の一部はケースに入った展示仏像の背景として使われる。

横尾氏自身もこの企画には大いに乗り気で「寺の宝物殿という特異な環境の中で、しかも仏像と組み合わせるといのは面白い着想。デパートやギャラリーで見るとどのように違った形で観客の目にうつるか楽しみ」という。

十カ月前から本格的にヨガに取り組んでいる横尾氏だが、この個展の下見に總持寺を訪れた十月末には、同寺で一週間参禅。(中略)

なお、個展は除夜の鐘のさ中の午前零時オープンという。これも異例の形式で、初もうで客に思いがけない楽しみが出来ることになる。

▽横尾忠則個展は、大人二五〇円。学生一五〇円

また、『週刊プレイボーイ』にも、ポスタープレゼンツの記事が載りました。

(資料二) 横尾忠則個展 展示会ポスター記事(週刊プレイボーイ・昭和五十一年一月合併号)

「正月元旦から十五日まで、鶴見・総持寺で開かれる個展のためのポスター。金色に輝く大判サイズ。もちろん限定版、三〇名の読者に。」

さらにこの展示会は盛況だったようで、『週刊プレイボーイ』二月一〇日号で、アンコール開催を行った記事が掲載されています。

(資料三) 横尾忠則個展 展示会再開催記事(週刊プレイボーイ・昭和五十一年二月一〇日号)

特報 大好評! 横尾忠則個展アンコール開催

この一月、川崎鶴見の總持寺で、横尾忠則個展が開催された。總持寺は曹洞宗大本山。宝物殿新築が成ったのを記念して、世界的な画家、イラストレーター横尾忠則氏の個展を開いたもの。同氏は、オカルトなど精神界のことに強い関心を持っており、画風にもそれが現れているが、同寺に一週間参禅したこともある。お寺と最先端に行くイラストレーターという、一見奇妙な取り合わせができたのは、これが機縁らしい。

さて、この個展、大変な好評だったが、見逃した者も多く、再開催を望む声が強まっていた。そこで、同寺では二月一日〜二日(午前十時〜午後五時)、もう一度この個展を開くことにした。本誌に連載された「うろつき夜太」のさし絵原画はじめ、ユニークな作品がずらり。

横尾氏のサイン会もあるし、抽選で二十名に同氏の豪華な作品集(二千元)をプレゼントしてくれるというから、ぜひ總持寺まで出かけてみよう。場所は鶴見駅下車、西口すぐそば。

「川崎鶴見」というのは、誤りですが、そのまま翻刻しております。

さて、四〇代以上の方でしたら、よく分かりますが、当時の若者には絶大な人気を集めていた雑誌が『平凡

パンチ』と『週刊プレイボーイ』です。当時新進気鋭、ニューヨークなどで個展を行った横尾忠則氏と、『週刊プレイボーイ』がなぜ関わっていたかといいますと、この記事によると『週刊プレイボーイ』に載っていた小説の挿絵を、横尾氏が描いていたということです。

それと、一九七〇年代というのは、私などはリアルタイムですが、ちょうど、「オカルトブーム・UFO・怪奇現象」などの時代でした。当時、横尾氏は、禅とかヨガ、さらにオカルトなどの関係で、非常に人気があったイラストレーターです。また、神秘主義的な傾向から、こういう企画なされたと思像されます。

次の資料は、二月の再開催時の『日刊スポーツ』の記事です。ここには、「禅寺とサイケ」というタイトルで、「一風変わった横尾忠則の世界」とあります。タイトルだけ資料の方に挙げさせて頂きましたが、「神秘：演出効果は満点」「大ウケ、前衛音楽も」ということです。これによると、あの宝物殿で前衛音楽も流していたのです。

次に、展示の内容ですが、後で企画書を紹介しますが、この記事にも少し写真があります。展示ケースの中に、横尾忠則氏のイラストがあり、少し見えにくいですが、その前に仏像を並べるといいう、仏像と横尾氏の神秘的な絵のコラボというものを行ったようです。また、サイン会を行ったことも記事にあります。横尾忠則氏が実際にやってきて、サイン会も行い、一日に一千人という、かなりの数の来館者がいたと記録されています。

次が『跳龍』の記事です。

(資料四) 「跳龍」昭和五十一年三月号「本山だより」

「横尾忠則個展」

こんど本山の中に管理部という一部門が設けられ、瑞応殿、宝物殿、駐車場などの管理運用を通し、より多くの人々から本山に足をはこんでもらい、親しんでいただくための企画を担当することとなった。その一つの試みとして、四月の開館を待つ宝物殿において横尾忠則個展が開催された。

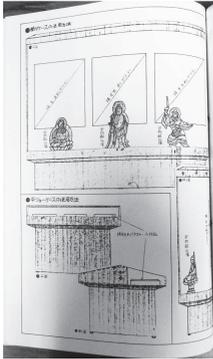


写真4

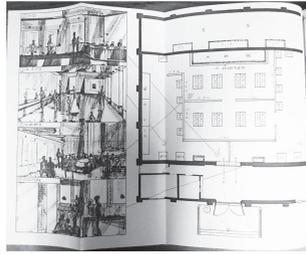


写真3



写真2

横尾忠則展をご覧になる禅師さま

元旦午前〇時〇分開館というだけでも一般世間では考えも及ばない奇抜なアイデアだが、横尾氏独特の幻想的な作品が古びた仏像とまことによく調和し、奥床しい香のかおりと現代音楽が渾融する空調完備の会場は余所のどこをさがしても見つかるまい。

「これまで何度も個展を開いたが、デパートなどのゴタゴタしたところがいい、一步門をくぐれば町の雑踏を忘れさせる静かなご本山の、しかもすばらしい宝物殿で、仏像とマッチした作品展示ができたことはほんとによかった・・・」と横尾氏は語るが、さらに作家の柴田錬三郎氏や写真家の篠山紀信氏も同じように激賞された。

個展は一応一月十五日で終わったが、こんなすばらしい個展を半月で終わらせるのはもつ体ないとの部外の声が多く、二月一日から十一日まで再開された。

また、岩本禅師（總持寺独住第十九世）も横尾忠則展をご覧になったという記事もあります。

（資料五）「跳龍」昭和五十一年三月号

「禅師さま起居万福」「横尾忠則展をご覧になる禅師さま」と題して、写真掲載（写真2）。

次の資料は、先程お話しした、三進が出した横尾忠則個展の企画書です。これも本山に残っていました。そこには、展示ブースのレイアウト、正面を入れてからの展示ケース位置（写真3）や、イラストによって展示の仕方が示されています。

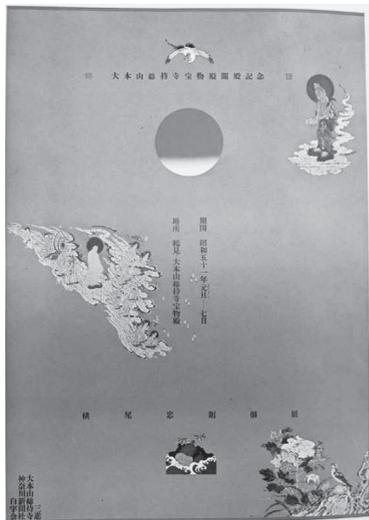


写真6

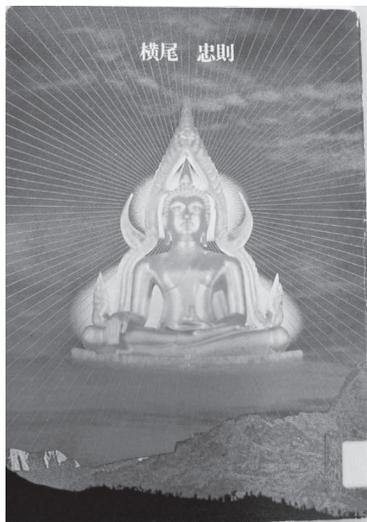


写真5

ます（写真4）。そこには横尾氏のイラスト・ポスターを展示し、その前に仏像を配置しようとした事が確認できます。

次の資料は、横尾忠則氏の個展の図録（写真5）です。これは仏教文化研究所の事務担当であった海野氏が収集した物と思われます。その詳しい経緯の方は分からないのですが、現在本山にも残っていない資料です。

この図録に、展示会のポスターが載っていました（写真6）。『週刊プレイボーイ』では、サイン入りの物を三十名に配ったという記事が載っていたものです。こうした企画も、かなりの人が集まった理由ではなかったかと思えます。ただし、このポスターには、来迎図などがコラージュされていたりするので、あまり禅宗的ではないのですが。

図録の内容としては、若い方は知らないかもしれませんが、西城秀樹という歌手のコラージュや『無次元』という雑誌の表紙があります。こうした少し怪しげな雰囲気、神秘的なモチーフのポスターが展示されていたと思います。また、インドの神様、ヒンディーの神様とのコラージュもあつたりします。次は、裏表紙ですが、大日如来を中心としたもので、ヨガとか禅とかチャクラとか、そういう、神秘体

験主義的なものが中心の展示であったようです。

その背景は、横尾忠則氏が著した、『我が坐禅修行記』という書に確認することができます。この書は、昭和五十三年（一九七八）、この展示会が行われた二年後の五月に出版され、六月にすぐさま第二版が出ています。鶴見大学図書館に入っているのは、初版本ではなく、第二版の方です。

この書には、總持寺で坐禅をしている写真があります。さらに、總持寺の百間廊下で掃除をしたり、今の御誕生寺の板橋禅師（總持寺独住第二十三世）がお相手をしている写真が掲載されています。それから、西麻布の永平寺東京別院（長谷寺）での修行、トイレ掃除を行っている写真があり、そして永平寺にも行っています。さらに、宮崎大学での瞑想の写真です。周りにいるのは学生で、美術指導の授業だと思えますが、授業に先だつてこうした瞑想を行っていた写真もこの本にはたくさん載っています。

また、『彼岸に往ける者よ』（昭和五十三年十月）という書もあります。内容は彼岸とはあまり関係ありませんが、実際に坐禅を体験した記録がこの中にも載っております。横尾氏は、継続的に坐禅体験・神秘主義体験のようなものを記録しています。

なお、『坐禅は心の安楽死―ぼくの坐禅修行記―』という書は、『我が坐禅修行記』の再版本です。これはつい最近、平成二十四年（二〇一二）に出たばかりです。アップル・コンピュータを作ったスティーブ・ジョブズが禅に傾倒しているということで評判になりましたが、そういう時流に乗って再版されたと思われれます。

以上のようなことが、横尾忠則氏が總持寺で展覧会を開く下地になったと思われれます。ただし、この展示会は企画会社が持つて来た話なのか、總持寺側から記念のイベントとして横尾忠則個展を企画したのかということは、記録の中には出て来ませんでした。

いずれにせよ、旗揚げ公演としては、非常に人気があったようです。

二、總持寺秘宝展

ただし、やはり本山内では「これでいいのか」という意見があったようです。資料に挙げましたが、「總持寺秘宝展について」ということで、總持寺秘宝展関係書類があります。これらは昭和五十一年の「案書綴」（總持寺の会議記録）の中にあるものです。もちろん全て公になっているものではありません。宝物殿に関するもののタイトルだけ挙げておきました。

（資料六）總持寺秘宝展関係書類（昭和五十一年度・庶務案書綴（一）監院寮）

- 14 宝物殿開館記念の予告を曹洞宗報に掲載の件（昭和五十一年二月二十三日）
- 15 宝物殿展示品依頼出張の件（昭和五十一年二月二十五日）
- 25 祖院・永光寺・大乘寺、三ヶ寺に「總持寺秘宝展」展示出品依頼状等発送の件
（昭和五十一年三月十一日）
* 出品依頼状及び一覧表添付

27 宝物殿開館特別展観の件

32 總持寺秘宝展ポスター発送の件

33 總持寺秘宝展展示品依頼の件 * 依頼状・出品借用書・出品依頼状送付先リスト

40 總持寺秘宝展収支決算報告書

51 宝物殿秘宝展御協力、御出品各御寺院に図録を送ってよろしいか

この「14」「15」「25」などの番号は、「案書綴」の通し番号です。昭和五十一年度の会議では、こういう議題が挙がったのです。

25番は、祖院・永光寺・大乘寺、三ヶ寺への總持寺秘宝展への出品依頼です。「*」を付けていますが、出品依頼状及び一覧表も記録されています。つまり、「こういう企画でやりますので、よろしく」という企画書及び依頼状と、どの寺院に何をお願いしたか、というものが残っております。

この記録は、今回は示しませんでした。当時の図録に出品目録が載っています。⁽¹⁾この「『總持寺秘宝展―瑩山禪師の世界―』出品目録」を見ると、全部で五十五点の展示品があったことが分かります。先ほどの薄井先生のお話にありました、観音像に関しては、一番の「木心乾漆 僧形觀世音菩薩坐像 祖院」だと思いますが、こういうものも出品されているということです。

開催主旨に関しては、27番の「宝物殿開館特別展觀の件」⁽²⁾に詳しく述べられています。「横尾忠則展が行われたけれど、それは宝物殿運営の一面であると見るべきであろう」とあります。

また、文中に「本山初詣行事の一環として」とありますが、これは先ほど言い忘れましたが、横尾忠則個展は、いつ開始されたのかと言うと、『神奈川新聞』の記事にもあったように昭和五十一年元旦の午前0時、年が明けたその瞬間に開館したのです。つまり、初詣に合わせて行われたのです。そういう、とんでもないというか、おもしろい企画であった事が分かります。

先に、「宝物殿運営の一面とみるべきであろう」と示したように、宝物殿本来の目的は、總持寺の文化財、曹洞宗の文化財を展示すべきだということです。これに基づき、各寺院に依頼が行われたのです。

「40 總持寺秘宝展収支決算報告書」には、入場者の実績、収支の記録があります。

三、總持寺関係展示会

次に紹介するのは、これまで紹介した二つの展覧会（横尾忠則個展と總持寺秘宝展）に先立って行われた展覧会と、



写真9



写真8



写真7

開館後の展示会です。

まず、宝物殿が建立前の展示会の資料です。現物は鶴見大学には無いのですが、先ほど申しました、仏教文化研究所に關係していた職員が、石川県立美術館に依頼して、カラーコピーを取り寄せたものです。

「本山第二祖国師峨山紹碩禪師600回大遠忌記念事業の二」（写真7）として行われたもので、会期は昭和三十九年（一九六四）八月一日～九月十三日、会場は石川県立美術館、主催は石川県立美術館・大本山總持寺、後援は北国新聞社等、展示品は八八点でした。

これは遠忌の記念で行ったものです。

その次の年になりますが、昭和四十年（一九六五）三月、東京三越でも同じく遠忌記念の企画展を行っています。

「本山第二祖国師峨山紹碩禪師600回大遠忌記念事業の二」（写真8）として、会期は昭和四十年三月二十三日～三月二十八日、会場は日本橋三越本店・7階ギャラリ、主催は大本山總持寺・大本山總持寺大遠忌奉賛会、後援は読売新聞社・報知新聞社・文化財保護委員会、展示品は絵画三三点・書跡三六点・工芸一八点・彫刻一〇点でした。

次の図録は、今回の発表の總持寺秘宝展（写真9）のもので、昭和五十一年四月に出されたものです。繰り返しになりますが、横尾忠則個展は、一月一日から始まり、それからさらに二月に第二回目を行いました。そして、四



写真 13



写真 11



写真 12



写真 10

月にこの秘宝展を行うという、大変な慌ただしさだったと想像されます。その展示会の時のポスター（写真10）が、宝物殿に残っています。「總持寺秘宝展―瑩山禪師の世界―」というタイトルで、重要文化財の提婆達多像がメインに描かれています。

その後、続けて、第二回秘宝展を、その年の秋、十月九日～十一月三日に、「秋の特別展観」（写真11）を行っております。その時には、「チャリティー墨蹟即売会」などを行ったようで、非常に活発な活動であったことが窺われます。その次、第三回のポスター（写真12）です。「奉修記念天

童如浄禅師七五〇回忌・第三回總持寺秘宝展」とあります。こちらは、翌年の昭和五十二年（一九七七）五月一日～五月三十一日です。この時は、道元禅師の師である天童如浄禅師の七五〇回忌の遠忌に合せて展覧会を行っております。その時のパンフレットも現存していますが、「第三回總持寺秘宝展」と記されています。

次のポスターは判然としないものです。順番からすると第四回目のものだと思いますが、第四回と謳っていませんので、断定できません。展示タイトルは、「祝晋山記念總持寺歴代住職墨蹟展」（写真13）と

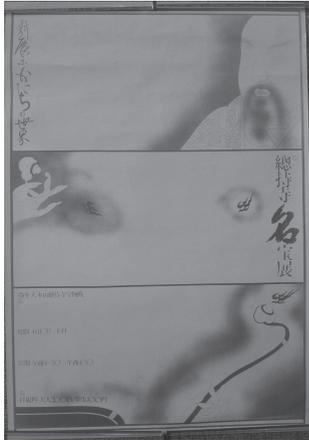


写真 15



写真 14

あります。ポスターには、日にちだけ四月二十九日～五月三十一日とあり、年号の記述がありません。先の「天童如浄禅師七五〇回忌」の展示会と期間が被るので、宝物殿で行われたのか正確なことは分かりません。『跳籠』の記事によると、昭和五十二年にこの展示会が行われたことは確かです。この年は、禅師様の交代が行われ、岩本禅師から乙川禅師に変わられました。それに関する企画展と考えられます。

このように第四回と次の第五回は、記録が明らかではありません。これは、初代館長の逸見梅栄先生がこの年の十一月に逝去なされたことによると考えられます。この年は、記録がよく残っていない、というか、実際には展示会が行われなかった可能性もあります。

第六回は、「かたちの世界」(写真14)というタイトルで、昭和五十三年(一九七八)十月十日～十一月五日に行っております。これも『跳籠』の記録から、年月日は確かだと思えます。

宝物殿には次のようなポスターが残っております。タイトルは、「かたちの世界」(写真15)とありますが、これは青焼きです。先に示した第六回「かたちの世界」と同タイトルですので、企画段階のポスターの可能性あります。記載される日には異なります。ですから、これは実際には使われなかったか、あるいは、日時も含めた企画段階のポスターであったと思われるます。



写真 17



写真 16

第七回は、「仏像 いのりの世界」（写真16）ということで、昭和五十四年（一九七九）十月十二日〜十一月十一日に行われました。この展示は、パンフレットも残っています。

その次、第八回、これが最後になりますが、「特別展 観禅と茶道」（写真17）が行われました。この企画が秘宝展の最後です。その後宝物殿は、春・秋の展覧会、それぞれの企画展を行っていますが、今まで述べてきたような「秘宝展」という形、また、ポスターを大々的に作って展示を行うということは、確認できません。

その後は、時代は大きく降りますが、平成二十三年（二〇一一）の御移転一〇〇年記念『曹洞宗大本山總持寺名宝100選』、それから、今行っており、開祖瑩山紹瑾禪師七〇〇回・二祖峨山禪師六五〇回遠忌記念『禅の心とかたち―總持寺の至宝―』という展覧会を行っています。

おわりに

今回の発表の結論を簡単に述べさせて頂きます。開館記念の展示会、「横尾忠則個展」と「總持寺秘宝展—瑩山禪師の世界—」をどのように位置づけるか考えますと、宝物殿が開館した五〇年前、すでに内外に積極的に曹洞宗・總持寺の文化財を発信していく方向性が示されていたのではなかったかと思えます。

昨年度の峨山禪師大遠忌においても、現代アート、それから仏殿前も含め境内で光のイルミネーションイベントを行いました。そして、今回の「禪の心とカたち」という企画展、仏殿での旗揚げ展、鎌倉国宝館、そして名古屋市博物館での展示を行います。このように「開かれた總持寺」ということを考えたとき、人々にいろいろな可能性を示す事が必要かと思えます。ただ単に絵画・仏像や墨跡など伝統的な曹洞宗の文化財を展示するだけでなく、新たな芸術の情報発信基地として總持寺が機能していくことの必要性が、示されていたと言えるのです。今後、我々もそういうことを考えていかねばならないのではないかと、ということを昔の資料を見ながら考えたのです。

大変、雑駁な、「曹洞宗の文化財」とはほど遠い発表になりましたけれど、宝物殿がどのような形で始まり、初期にはどのような展示を行っていたかということ、皆様知って頂けたかと思えます。ご静聴ありがとうございました。

【注】

- (1) 『總持寺秘寶展—瑩山禪師の世界—』 出品目録
1 木心乾漆 僧形觀世音菩薩坐像 祖院
2 天童如淨和尚語錄 總持寺

- 3 木造 瑩山紹瑾禪師倚像 永光寺
 4 木造 明峰素哲禪師倚像 永光寺
 5 木造 峨山韶碩禪師倚像 永光寺
 6 提婆達多像 總持寺
 7 總持寺中興縁起 總持寺
 8 正法眼蔵『諸法実相の卷の斷簡 總持寺
 9 仏垂般涅槃略説教誡經 總持寺
 10 仏祖正伝菩薩戒作法 大乘寺
 11 示紹瑾長老 大乘寺
 12 嗣書の助書 広福寺 (影印本)
 13 瑩山禪師 御袈裟 祖院
 14 瑩山禪師 珪砂行李 祖院
 15 瑩山禪師 御絡子 永光寺
 16 道元禪師 螺鈿袈裟箱 祖院
 17 如浄禪師 扨子 大乘寺
 18 道元禪師 扨子 大乘寺
 19 義介禪師 扨子 大乘寺
 20 瑩山禪師 扨子 大乘寺
 21 明峰禪師 扨子 大乘寺
 22 素哲請取状 大乘寺
 23 伝光録
 24 前田利家像 總持寺
 25 前田利家夫人像 總持寺
 26 法衣相伝書 広福寺 (影印本)
 27 洞谷山尽未來際置文 永光寺
 28 木彫 十一面觀世音菩薩 永光寺

- 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34 33 32 31 30 29
- 哲首座立僧普説 広福寺 (影印本)
素哲僧祿状 大乘寺
洞谷山讓状 大乘寺
峨山禪師御袈裟 祖院
峨山禪師頂相 總持寺
總持寺讓状 總持寺
總持寺十箇条之亀鏡 總持寺
仏祖正伝菩薩戒教授文 海岸寺 (影印本)
洞谷文書注文 永光寺
洞谷山寄田注文 永光寺
洞谷山勤行条文 永光寺
洞谷山松樹禁制文 永光寺
金銅五鈷鈴 祖院
瑩山清規写本 大乘寺
瑩山清規写本 大乘寺
鎌倉彫獅子牡丹文香合 永光寺
洞谷記写本 大乘寺
瑩山禪師自贊画像 總持寺
瑩山禪師自贊画像 東嶺寺
示性禪師公偈 總持寺
三木一草事 個人蔵 (影印本)
韶陽折脚之画賛 永光寺
龍天白山之書 千光寺 (影印本)
後村上天皇勅書 永光寺
後桃園天皇勅書 總持寺
明治天皇勅書
住山記

(2) 開催趣旨 (27 宝物殿開館特別展観の件)

御開山瑩山禪師六百五十回大遠忌記念事業として一昨年十月宝物殿の落慶をみた。

而して昨年の八月より宝物殿内部の展示用施設の拡充、空調機械設備の調整、知庫寮倉庫から宝物殿収蔵庫への寺宝の引越等の試行期間を経て、今年正月「横尾忠則個展」を開催する運びとなった。しかし、これは宝物殿運営の一側面とみるべきであろう。本年初詣行事の一環として本山が地域社会並びに世間一般の人々との接点を求める新しい試みとして出来たもので、この展覽会は本山が禅を求める多くの人々に仏法、本山とは何かを広く理解していただく手がかりとしての行事であった。

しかるに平面、宝物殿建立には宗門各位の力添によって落慶をみたことも事実である。よって宗門人を対象とする宝物殿披露並びに開設記念展観が強く望まれるようになった。

以上の点を考慮して、展観準備期間等も不十分ではあるが、四月十日授戒啓建の日より五月五日まで開殿披露するのが適当な月日ではないかと思われる。

ここに宝物殿専門員諸師との親密なる検討を重ねた結果、この展観啓業の記念に最も良い企画は何か……。宝物殿落慶の経緯よりして、ご開山瑩山禪師の世界と題してご真筆、ご遺品を中心に可能な限り一堂に会えし、もってご開山への報恩のまことを捧げる記念展観とするのが一番相応するのではないかと……

かような主旨で本山最初の本格的展覧を企画立案したものである。

この「總持寺秘宝展」——瑩山禪師の世界——の特別記念展観啓業が仏々祖々が単伝した法が現代に強く現成される。序章として宗門古仏の仏法の原点を深く理解することは法孫として努めであろうと考えます。

- 一、期間 昭和五十一年四月十日—五月五日迄
- 一、場所 大本山總持寺宝物殿
- 一、名称 「總持寺秘宝展」——瑩山禪師の世界——
- 一、管理並運営 管理部中心として
- 一、協力 全山 宗門 等
- 一、拝観料 無料